

当院で経験した後天性第V因子インヒビター症例の凝血学的検査における特徴

◎城田 紗希¹⁾、金 貞姫¹⁾、川村 和光¹⁾、奥村 由依¹⁾、戸上 恭葉¹⁾、石川 裕介¹⁾、鈴木 敦夫¹⁾
国立大学法人 名古屋大学医学部附属病院¹⁾

【背景・目的】凝固第V因子（FV）インヒビターは、一般にFVの活性を阻害する自己抗体が出現し、FV活性が後天的に低下する稀な病態である。稀であるが故にこれまでにまとまった報告は少なく、PTおよびAPTTの延長の程度やクロスミキシングテストにおける病型は多様であるとされている。そこで今回我々は、当院で経験したFVインヒビター4症例を後方視的にレビューし、特に鑑別が必要となるビタミンK（VK）欠乏症症例を対照としてPT・APTT・クロスミキシング試験の特徴を探るべく両者の比較を行った。

【方法】2018年から2022年の間に名古屋大学医学部附属病院にてFVインヒビターもしくはVK欠乏症と診断された各4症例を対象とした。PTはデイドイノビン、APTTはトロンボチェックAPTT-SLA（いずれもシスメックス株式会社）を用いて測定したデータを使用した。

【結果】VK欠乏症に対しFVインヒビター症例では、PTの延長度に対しAPTTの延長がより顕著であった。クロスミキシング試験においては、いずれの症例においてもFVインヒビターではPT・APTT即時反応・APTT遅延反応においてインヒビターパターンを呈し、VK欠乏症では因子欠乏パターンを呈した。

【考察】FVインヒビターの症例におけるAPTTの著明な延長は、APTT試薬に対するFVの感受性が他の因子に比べ高く、一方でPT試薬では相対的に低いことが要因であると考えられた。クロスミキシング試験では、FVインヒビターの1症例において2時間加温後の遅延反応でより阻害反応が増長される結果を認めたが、全体として一定の傾向を示すものではなかった。FVインヒビターは稀な後天性凝固異常症であり、その鑑別診断のためにはFV活性やFVインヒビターを定量する必要があるが、スクリーニング検査であるPTやAPTTの試薬特性を十分に理解しクロスミキシング試験の結果を組み合わせることで一定の鑑別が可能であることが示唆された。

連絡先:052-744-2588